

相対的貧困と絶対的貧困

1. 絶対的貧困

絶対的貧困とは、人間の生物として命が危うい程の物質的欠乏（主に食糧）であり、その状態を低所得状態として捉えているのが、伝統的な貧困概念である。食糧や衣類や燃料などを、生存に必要な最低量をも購入できない程の低所得状態が絶対的貧困であり、その低所得の限度額を**絶対的貧困線**と呼んでいる。貧困線は人間の一日当たりの必要カロリーを当初 3500 カロリーとして食糧費を算出し、それにその他の諸経費を積み上げた額である。

この考え方は、科学的貧困調査、ヨーク調査（イギリスの産業革命期）で有名なローントリーが考案した貧困線であり、貧困率とは貧困線以下の低所得状態の住民が全体の何パーセントなのかを示す数値である。**貧困率**の高い国は、貧困者の多い、貧しい国である。

（日本の終戦直後の生活保護基準はマーケットバスケット方式とあって、この方式で計算されていた。）

このような必要諸経費を積み上げて生命維持のための最低所得額を求めるという発想は、産業革命期のイギリス都市生活者（労働者）の生活実態を背景にしていると思われる。

当時世界に先駆けて産業革命を経験したイギリス、ロンドンでは、農村から流れて来た人々が工場労働者となって都市に生活をしていたが、その生活は、劣悪住宅が広がり、不衛生、過密、児童労働、低賃金、長時間労働などと、人類史上初めて大規模に現出したスラム街を形成していた。

1832 年イギリス政府が行った児童労働調査委員会の報告書には、6 週間に渡って、少女たちが朝 3 時から夜 10 時ないしは 10 時半まで働かされた事、5 分でも遅刻すると、賃金を 4 分の 1 カットされること、事故で指を無くした少女もいたが、その段階で賃金支払いが停止されたことなどが報告されているという。

さらに工場内の空気は汚れているため、幼い頃から長時間働きつづける子供たちは、肺病などで短命になりがちで、1842 年の「平均寿命の比較調査」では、リヴァプールの労働者の平均寿命はなんと 15 歳。同じリヴァプールの「知識層・ジェントリ地主」は、35 歳である。労働者は、平均寿命だけでなく、平均身長もどんどん小さくなっていった¹。

フランス人の平均身長との差がどんどん開き、イギリスの陸軍が徴収する若人の体位の劣勢が問題となり、この事態に対して政府としての対応が検討された。この時代にロンドンのスラム街で、貧困な都市労働者を訪問して行う生活相談が、我々ソーシャルワークのルーツである。

この生命の危機を来す程の貧困こそ絶対的貧困であり、生物としての人間の生存が果たせない程の貧困（生活苦）、その低所得状態を絶対的貧困と定義している。

¹ <http://www.geocities.jp/timeway/kougi-88.html> 2013/03/22

当時のロンドンではこのような貧困が都市住民の 30%以上に及んでいるという実態を、成功した資本家（クウェーカーなどの社会派）ブースやローントリーが、私財を投じて科学的貧困調査（ロンドン市民の全数調査、17年間追跡など）を行い、明らかにしていった。

この規模で貧困が広がっているのであれば、貧困は個人的な原因(貧困者自身の怠惰)で起こると言うよりは、社会構造上の問題として、貧困は、慈善では解決できない問題である事が示されていった。この調査報告書はその後（戦後）のイギリスの社会保障「ゆりかごから墓場まで」の構想に大きな影響を与えている。

2. 相対的貧困

戦後となって「ゆりかごから墓場まで」の社会保障制度が進められ、福祉国家は完全雇用²を目指して、貧困率は上記ロンドン調査時の8分の1にまで下がる豊かな時代を迎えた。貧困は撲滅されるかに見えた。しかしP. タウンゼントは、その豊かな福祉国家の時代が到来した1965年、その内部の新しい貧困、相対的貧困を提示している。

「貧困な人々の生活資源は、平均的な個人や家族が自由にできる生活資源に比べて極めて劣っているために、通常社会で当然とみなされている生活様式、習慣、社会的諸活動から事実上締め出されて（deprived）いる³とする「剥奪(deprivation)」という概念によって輪郭をあきらかなされた相対的貧困は、1970年代をむかえて定着をみている。

「剥奪」とは、食糧、住居等生活財の剥奪といった物質的欠乏と、それに伴う心的な剥奪感が一体となった状態と考えられ、この点で質的なものを視野に入れた新しい貧困とされる。この貧困の相対的貧困線は、社会の一般的、平均的水準を示す所得額であり、OECD（経済協力開発機構）では、「等価可処分所得（世帯の可処分所得⁴を世帯人数の平方根で割って算出）が全人口の中央値の半分」であり、これ未満の所得の世帯員を相対的貧困者として、相対的貧困率を算出する。現在先進国の多くの国で使われている世界標準的な相対的貧困線である。

社会の平均的水準は豊かになっていても、その水準以下で生活をする人々の剥奪感が人間に無力感を引き起こすとして、新しい貧困、相対的剥奪（貧困）が提示された。西欧福祉国家群の迎えた豊かな時代にも、その内部には相対的貧困線以下の所得で生活をする人々がおり、わが国にもホームレス状態の人や、絶対的貧困線以下でも公的助成を利用できずに餓死、凍死する人々さえも散見されるわけである。

² 「一般的には働く意欲と能力をもち、現行の賃金水準で就業を希望するすべての人が雇用されている状態。」ブリタニカ国際大百科事典より

³ 杉村宏 『貧困・不平等と社会福祉』 有斐閣 1997年4月 P72

⁴ 「個人所得の総額から直接税や社会保険料などを差し引いた残りの部分で、個人が自由に処分できる所得。いわゆる手取り収入のこと。」 <http://dictionary.goo.ne.jp/leaf/jn2/40823/m0u/>

豊かな福祉国家の時代には、もはや絶対的貧困にとって変わり、「相対的貧困」が問題なのか、そうではなく絶対的貧困こそが貧困問題の核心なのか、それを巡って議論は続いた。「新しい貧困」とされた相対的貧困は、その社会で当然とみなされる生活様式を送る人々との比較において、自らの生活、立場を惨めと感じて、無力感、無気力状態をひきおこす貧困として提示されたのだが、他者との比較に於いて問題になるという意味で、その本質は「格差、不平等問題」であった。

3. 不平等問題

この不平等問題とは、その人の所得額の低さだけでは測る事はできない問題であり、比較する人々（準拠集団）、比較する相手との差、格差によって初めて測る事ができる問題である。この点で不平等問題である相対的貧困は、誰と比較するのかによって評価の変わる問題であり、さらには「何の不平等」を問題にして比較するのか「所得、富、幸福、自由、機会、権利、ニーズの充足⁵」などの様々なテーマのうちで、どの事柄を問題にすべきなのか、人間の生活にとって大切な事は何かと言う、一種の「規範性」を抱える問題でもある。

P. タウンゼントが示した新しい貧困、「相対的貧困」は「生活様式の平等」を重要としている。しかしこの「生活様式」とは多次元に及ぶ問題構成であり、時代、地域、文化（男女差別の強さ、家族制度、産業構造等）にも影響をうける問題である。

そのため「所得の平等」を厳格に求めれば、病弱な人々には医療費が、障害ある人々には介護の費用がかかるなど、生活費用、所得額だけを平等にしても、「生活様式の平等」、「生活の中身の平等」は果たせない事も多い。そして社会の文化、経済システムなどの時代とともに変化する問題を抱えているのが、「生活様式の平等」であり、ここに不平等問題である相対的貧困の議論の複雑さがあり、財の再配分問題、経済問題ばかりでは解決できない社会文化的、政治的な問題として現れるわけである。

他者との比較に於いて傷む人間存在、社会関係を生きる私達、差異を識別するホモサピエンスなればこそ、不平等問題は人間に固有であって本質的な問題と言わざるを得ない。

4. 絶対的貧困と相対的貧困の関係

ところで格差に敏感な新しい貧困測度、相対的貧困を良く捉える貧困測度、セン測度がアマルティア・センにより開発された。この測度、貧困指標は「貧困と不平等と言う相互に関連してはいるが異なった二つの関心を統合する最初の試み⁶」とされ相対的貧困と絶対

⁵ アマルティア・セン 池本幸生・野上裕生・佐藤仁訳 『不平等の再検討』 P2
岩波書店 2005年6月

⁶ 鈴木興太郎 後藤玲子『アマルティア・セン 経済学と倫理学』P223
実教出版 2005年11月25日

的貧困の関係を数理的に明らかにしたものである。

(このページの <http://mirai21canal.com/PDF/poverty/SenPovertyIndex.pdf> を参照)

相対的貧困の提示、その定着は、貧困について、人間は社会的な存在なので、生活物資の絶対的欠乏（絶対的貧困）ばかりではなく、同じ社会で暮らす平均低水準で生活する多くの人々（他者）と比べて、自分の生活が劣っている場合の感覚、格差、不平等問題を含んでいる事を示しているといえよう。

不平等問題としての相対的貧困は時代の移り変わりの中で、社会の所得分布の変化にともない、膨張し、あるいは縮小して、絶対的貧困を露出させ、あるいは覆い尽くしながら、貧困問題全体を形作っている。アマルティア・センの貧困測度は、貧困とは絶対的貧困と相対的貧困の重ね合った状態であり、相対的貧困の本質は格差、不平等問題である事を示している。